

香取遺産

Vol.40

「水面に映る灯」 つのみやかし じょうやとう 津宮河岸の常夜燈



▲津宮河岸の常夜燈



▶参詣人で賑わっていた当時

津宮鳥居河岸、利根川堤防の中段に、常夜燈と呼ばれる石塔がぼつんと1基建っています。

江戸後期に著された久保木清淵の『香取参詣記』や赤松宗旦の『利根川図志』などの絵図、明治後期の古写真に見られる津宮河岸は、利根川の中に神宮の大鳥居が建てられ、今と違い堤防もなく、猪牙舟や大型の帆かけ舟が直接接岸している様子がわかります。

常夜燈は河岸の中心、鳥居に向いあつて据えられ、この河岸の両側に「村田屋」、「佐原屋」などの舟宿が軒を並べ、香取・鹿島神宮の参詣人の宿泊所としても賑わっていたようです。常夜燈は、江戸時代に石灯籠から派生したといわ

れ、街灯や灯台の役割を果たし、神社・仏閣では信仰の対象として設置されるようになります。

津宮河岸の常夜燈は、2段重ねの台座の上に基礎・方柱の竿・中台・火袋（火を灯す部分で各面に窓をもつ）・笠・宝珠で構成されています。現在の高さは280cmですが、古い写真を見ると台座は3段重ねで、360cmを越える大規模なものだったようです。

この石塔は、利根川筋の下総国猿島郡辺田村を始めとする近隣村々（現在の茨城県岩井市・境町周辺）の36人が講を組み、明和6年（1769）3月に奉納したもので、航行の安全を祈願したと思われます。河岸の繁栄を支えた舟

運は、徳川家康の家臣松平家忠の『家忠日記』から天正20年（1592）には開かれていたと推定されます。その後、承応3年（1654）には利根川東遷が完成し、江戸から銚子までの航路が整えられました。これに伴いこの地域の舟運も発達し、江戸時代後期には隆盛を極めます。

その後、明治31年に成田線が開通、さらに佐松線が延長されると舟運は徐々に鉄道に取って代わられ、香取神宮の玄関口として繁栄を誇った津宮河岸も常夜燈もその役目を終えます。

この常夜燈は、利根川筋に残るものでは最古、津宮河岸の繁栄を伝える遺物として昭和52年に市の有形文化財に指定されました。